

書評

『インパクトファクターを解き明かす』

山崎茂明／著

東京 情報科学技術協会

2004年3月20日発行

B5版 52p 定価 1,200円



近頃、病院図書館においても蔵書構成を考える際に「インパクトファクターを参考にする」という館が増えている。病院図書館のような小規模図書館では、購入雑誌の選定が非常に大切であり、ひとつの指標としてインパクトファクターを知っておくことは、図書館員として重要なことである。

では、インパクトファクターとはどのような意味を持ち、どうやって計算されているか、私達はきちんと知っているのだろうか？ 本書は、「インパクトファクターがどのように生まれたのか」から「インパクトファクターがかかえる問題」、「正しい理解へむけて」まで網羅している、まさに「インパクトファクターを解き明かす」1冊である。

本書によると、インパクトファクターは引用索引を実現し発展させる過程で提案されたものであり、今日のように個人や機関の研究業績指標を目的としたものではない。インパクトファクターの提案者である Eugene Garfield 博士は、個々の研究者の評価に利用しないよう事あるごとに警笛を鳴らし、注意を喚起してきた。しかし、それにも関わらず、間違った使われ方は世界中で後をたたない。

そもそも、インパクトファクターが考案されたのは、雑誌を評価する際の優れた指標が求められたからであり、それによって、もっともよく引用される雑誌を識別し、影響力の高い雑誌を明らかにすることを目的としている。一方、年代を追って見ていくと、臨床医学の代表的な総合医学誌である New England Journal of Medicine は常に上位を占め、分子生物学では Journal of Experimental Medicine が1978年に Cell に追い越され、1995年には上位5位ランクから姿を消した。このように、長期に渡りランク変化を見ていくと、引用データから科学研究動向を眺めることもできる。

さらに本書では、「インパクトファクターの応用」としてステップマップの解説がある。ステップマップとは対象誌がどのような雑誌をよく引用しているか矢印を用いた図で表すことにより、対象誌間の影響関係や分野における引用マップが見えてくるものである。実際に著者が作成した Oncology 領域のマップは大変興味深い。この領域で引用の矢が多い中心誌は Cancer Research であり、次いで Proceeding of the National Academy of Science USA、Cancer であった。逆にインパクトファクターランク1位の Journal of National Cancer Institute、2位の CA-A Cancer Journal of Clinicians は引用の矢数が少ない結果になった。これは、インパクトファクターによる上位誌が、ステップマップによる中心誌と必ずしも一致しないということであり、インパクトファクターのみで雑誌コレクションを判断するのは早計であることがわかる。

著者が示すように、インパクトファクターに頼り過ぎるのは危険なことであり、雑誌を評価する際のひとつの指標としてインパクトファクターをとらえるべきである。大切なのはインパクトファクターを理解し、その上で雑誌全体を見極めることである。本書はインパクトファクターに関して初心者の方には入門書として、実際に蔵書構成の参考としている方には改めてその内容を知り得る資料として大いに役立つであろう。

(文責：若杉 亜矢／松下記念病院)